



思いつきSS

kurogobou

ネタ①：ちょっと変わった恋愛（？）物

「何か特別なことがあるわけでもないけれど、毎日が楽しみなの」

誰かが言ってたある一言。

誰の言葉だったか...

彼はぼんやりとそんなことを考えてた。

「どうかした？」

急に声を掛けられハッと我に返る。

「いや、ちょっと考え事...」

彼は声を掛けてきた彼女にそう言うと、机のノートに視線を戻す。

彼女に勉強を教えてもらってる最中に、いつの間にか意識が何処かに寄り道していた。

でも何故急にそんなことを考えてたのだろうか。

そんな疑問も彼女の言葉で欠き消えた

...筈だった。

彼女の声聞く程、その言葉はだんだん頭の中に響いて来る。

結局、彼女に教えてもらった筈の内容は霧が掛かってうやむやになってしまった。

彼女に勉強を教わって数日経った。

結局、テストは残念な結果に終わり、頭の中はあの言葉だけがぐるぐる輪を作っていた。

『何か特別なことがあるわけでもないけれど、私は毎日が楽しみなの』

彼女に似た誰かが言ってた気がする。

でも誰だったか。

学校の屋上で快晴に近い晴れ模様の空を仰向けに見ながら、彼は思いだそうとしてた。

『貴方が付き合っていたのは本当にあの彼女？』

「え!？」

突然何処からか聞こえた声に彼は飛び起きた。

しかしもう声は聞こえない。

声の主が見付かるわけでも無いが、彼は周囲を見渡した。

しかし何も無い。

いつも見える景色だけ。

「どういう意味だよ...」

彼の行き場の無い声はそのまま風に流されていった。

あの言葉を聞いて以来、彼は彼女の事をもっと知るため彼女の家を訪れた。

考えてみれば一度も彼女の家に来たことなんて無かったと思う。

『貴方が付き合っていたのは本当にあの彼女？』

あの言葉の意味が頭から離れず、何か無いかとついつい彼女の家の中でキョロキョロしてしまう。

「私の家、そんなに珍しい？」

「あっ、いや...初めてだからつい」

そう言って誤魔化して案内されるまま彼女の部屋に向かう。

彼女の部屋の前に着くと、扉に彼女の名前が書かれた可愛らしい黄色いネームプレートが掛かっていた。

「此処が私の部屋、どうぞ」

「お邪魔します!!」

そう言って中に入ると綺麗に片付けられた爽やかな部屋が広がってきた。

本棚には参考書や小説が綺麗に整頓されており、兎や犬などの小さなぬいぐるみが部屋の所々を占領していた。

「意外にファンシーだな。いつも小説読んでも勉強してるからそんなイメージ全然無かった...」

「悪かったわね。まあゆっくりしてて、今お茶でも持ってくるから」

そう言って彼女は部屋を出ていく。

そわそわしながらも初めて入った彼女の部屋のものを色々見ていると、机の上の写真立てに目が止まった。

「アイツの小さい時のか？」

最初はそんな軽い気持ちで写真立てを手にとって見てみる。

写っているのは小さい彼女と彼女の母親、そして...

彼女にそっくりな女の子。

「え...？」

彼は目を疑う。

彼女の母親とは前に一度会ったことがあるから間違い無く彼女の母親だと解ったのだが、この彼女にそっくりな女の子は一体...

姉妹だ何て彼女からは一度も聞いたことが無い。

『貴方が付き合っていたのは本当にあの彼女？』

脳裏にあの言葉が過る。

「いや...まさかな...」

彼はそう言うと写真立てを机の上に戻そうした。

その時、お茶と茶菓子を持った彼女が部屋の前に戻って来ていた。

彼と彼女はそこで目が合った。

「...あっ」

「.....見たんだ？」

「えっと...」

言葉が出ない。

踏み入れてはいけない領域に足を踏み込んでしまったような気がした。

彼はとにかく写真立てを机に戻した。

「上手くいったと思ったのに...」

持ってきたお茶と茶菓子を机に置くと、彼女は写真立てを手に取った。

「えっと...、そのお前そっくりな子って...」

「うん、私の双子の姉」

写真に写る彼女にそっくりな女の子のことを、申し訳なさそうに聞く彼に彼女は微笑みながら答える。

「そして、元貴方の恋人」

「.....」

彼女の言葉に彼は驚かなかった。

そんな気がしたから。

「驚かないの？ ...ってことは気付いてた？」

何処か哀しげに彼女は尋ねた。

「数日前にさ...、ふと思い出したんだ。『何か特別なことがあるわけでもないけれど、私は毎日が楽しみなの』って誰かが言ってたなって...」

「それ、お姉ちゃんの口癖だ...」

彼の言葉に彼女はポツリと答えた。

「お姉ちゃん、私より本が好きだったから、何か影響されたみたいで...」

あれこれ説明していた彼女の目元がいつの間にか潤んでいた。

「.....会いたい？」

恐る恐る尋ねる彼女を見て彼は頷く。

今まで騙されてた筈なのに、怒る気にはなれなかった。

彼女が余りにも哀しそうな顔をするから。

「じゃあ行こうか...？」

「え？ 行くって...」

彼女に手を引かれ、そのまま彼女の部屋を飛び出した。

彼はただ彼女に着いていくことしか出来なかった。

会うなら彼女の部屋の隣の部屋にでも入れば会えるのだろうと思ったのだから、そうでは無いようだ。

別居でもしてるかと思い聞こうとしたが、ただ黙って彼女の後を追った。

彼女につられやって来た場所に彼女はいた。

いや、眠っていた。

案内されたのは見晴らしの良い所にちょこんと建てられた墓石の前。

「...ごめんね、バレちゃったよ」

彼女はそこに姉がいるかのように墓石に語り掛けた。

彼は手を合わせる。

気付けなくて申し訳ないという気持ちを込めて。

「...何時だと思う？」

何時、死んじゃったと思う？」

急な問いかけに彼は思考を巡らせる。

何時？ 何処で...

「.....初めてのデートのこと覚えてる？」

「勿論、確か俺が遅刻して...」

え？ まさか...

急に1つの可能性が頭を過り、顔色を変える。

「もしかして、デートが終わって直ぐ...」

彼の疑問に彼女は顔を横に振る。

「それよりも前、一回断った事あったでしょ？ 当日に...」

「え？ ああ、集合場所には来たけど直ぐ帰ったんだよな？ 確か急用が出来たとか言って.....」

そこで思考が止まる。

何かが引っ掛かった。

「もしかして...、集合場所に来たのって.....」

そこまで言うと、彼女は悟ったのか小さく頷いた。

「そう、私。

姉に頼まれて...、でも無理だよ。

『初デートだから、行かなきゃ。待ってるから...、私が行けないなら代わりに行ってきて。彼を待たせないで...。楽しんできて。』

って言われたって...、楽しめる訳無いじゃない...。

死にそんな姉が心配で...」

涙を流しながら彼女は叫ぶように話す。

彼はただ、彼女を抱き締めることしか出来なかった。

落ち着いてから彼女はあの日、何があったか話してくれた。

「あの日の朝、姉が家を出て直ぐに黒板を爪で引っ掻くような音が外から聞こえたの」

墓石をチラリと見ながら彼女は話す。

「近くで事故でもあったのかと思って音が聞こえた方に行ってみたの。そしたら、ブロック塀にトラックが衝突してて...。

その近くで小学生くらいの男の子と姉が倒れてた。

多分姉の事だから、男の子に突っ込んできたトラックから男の子を守ろうと庇ったんだと思う。」

辛そうに彼女は話す。

「私は直ぐ駆け寄ったよ。

まさか姉が倒れてるなんて思っていないもの。

なのに姉は自分より、一緒にいた男の子の事ばかり心配するんだもん。

その上...、貴方の事まで心配するんだもん...。

『彼が待ってるから行かなきゃ...、私が無理なら代わりに行ってきて...』って...。」

目に涙を浮かべて彼女は語る。

「それで...、一度来てくれたのか...。

でもだったら、どうして教えてくれなかったんだ!？」

彼の言葉に彼女は一度言葉を詰まらせるが、ゆっくり口を開けた。

「姉が黙っててって...」

「.....」

どうして？

彼はそう聞こうとしたが、聞き出せなかった。

なんか分かった気がしたからだ。

自分に心配をかけないようにするためだったのだろう。

「で...、その後は？」

彼が再び尋ねると、彼女はゆっくり話を続けた。

「姉が搬送された病院に行ったんだけど...、もう手遅れだった」

「.....そうか、ごめんな」

彼は思う。

あの日にデートの約束なんかするんじゃないかと。

「その後、看護婦の人が私に伝言をくれたの。

姉から私と貴方にとって...」

それを聞いて彼は彼女の姉の墓を見る。

逆に色々言いたいのは自分の方なのにと思いながらも、彼女に視線を戻した。

「『初デート行けなくてごめんね。短い間だったけど楽しかったよ』って姉は言ってたって...」

それを聞いたとたん、彼が堪えていた涙腺が崩壊した。

「.....」

もはや出るのは涙だけだった。

「.....、憎くないのか？ 俺の事。

俺とのデートに行かなきゃ姉はまだ生きてたんじゃないか？

俺のせいで姉はタヒんだのに、どうして俺と一緒にいられるんだよ!!」

ようやく出た言葉。

泣き叫ぶような声は風に流され、響き渡る。

その場に泣き崩れた彼に合わせてしゃがみ込んで彼女は言う。

「だって...、頼まれちゃったんだもん。

『彼の事お願いね。

私が気に入ったんだもん、きっと気に入ると思うから。

後、この事は彼に内緒ね？ 彼に心配掛けたくないから。』って…。

最初は憎かった。

殺してやろうとも思った。

でも、どうしてだろうね。

一緒に過ごしてたら殺意とか憎しみとか消えてるんだもん。

だから、姉の分まで貴方と幸せになろうって…

姉との約束を守ろうって…」

いつの間にか彼女も泣いていた。

彼はそっと彼女を抱き締める。

「そうだったのか……、ごめん。

そしてありがとう。

俺なんかの為に」

彼の言葉に「そんなことない」と言いたそうな顔で彼女は顔を左右に振る。

「……こんな俺だけど、これからも一緒にいてくれるか？

お前の姉の分も一緒に…」

涙や鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で彼は聞く。

「これからも…よろしく…お願いします…。」

彼女は涙を拭いながら、彼の言葉に答えた。

ネタ②：お題を出し合う男女

朝のバス停のベンチ。

バスが来る一時間前。

私はある男性を待っていた。

彼とはここで知り合った。

いつの間にかバスが来る一時間前に来て会話するのが日課になっていた。

「ごめん、待たせた」

数分後、ようやく彼は来た。

「ちょっと遅い...」

「悪い、お題忘れそうになって...」

荒く呼吸する彼はそう言うと私の隣に座ると、メモ用紙を一枚渡してきた。

「.....遅れて来たのは許す。

それより、私からのお題はやって来た？」

「勿論、[猫][泥棒][ゴリラ]の3つだったよな」

この時間が待ち遠しかった。

説明しておく、彼との会話とは片方が3つのお題を出し、もう片方がその3つのお題を全部使って何か物語を作るのだ。

作った物語は朝この時間にお題を出した方へ発表。

その後評価や反省を行う。

今回は私がお題を出し、彼が発表という形な訳である。

ちなみにさっき渡されたメモ用紙は彼から私へのお題である。

説明はこれくらいで良いだろうか？

私は早く彼の発表を聞きたい。

「じゃあ始めるぞ？

ある日ゴリラ顔のおっさんが、動物園の園長がとても大切にしている金の招き猫を盗もうと深夜に動物園に忍び込んだ。

何でも金の招き猫は飼育員達の事務所にあるとか。

それで何とか事務所に潜入、招き猫を盗んでいざ立ち去ろうとした。

しかしおっさんは逃げられなかった。

捕まったんだ。

何故なら、その動物園で一番の人気者のゴリラの花ちゃんが飼育員の1人と夜のお散歩をしていたんだけど、どうやら花ちゃんがおっさんを見付けるなり一目惚れしちゃっておっさんのことを離さないんだ。

そのまま花ちゃんといた飼育員が通報しておっさんは逮捕されましたとさ。」

彼が話し終わると同時に私は判定を始める。

「ん～...70点。

話は面白いんだけどね。

オチを狙い過ぎかな？」

私の評価に彼は悔しがる。

「いい線言ってた気がするんだけどな～」

腕を組んで彼は何処が駄目だったか思考を巡らせていた。

そこにバスがやって来た。

「もう時間か、じゃあまた明日ね？」

「お題忘れんなよ？」

私はバスに乗りながら言うと彼はそう言って見送ってくれた。

彼が乗るバスは私が乗るバスの次のバスだ。

一番後ろの席に座り窓越しに彼を見てから渡されたメモ用紙を見る。

『お題 [空][廃墟][少女]』

さて、どうしよう…。